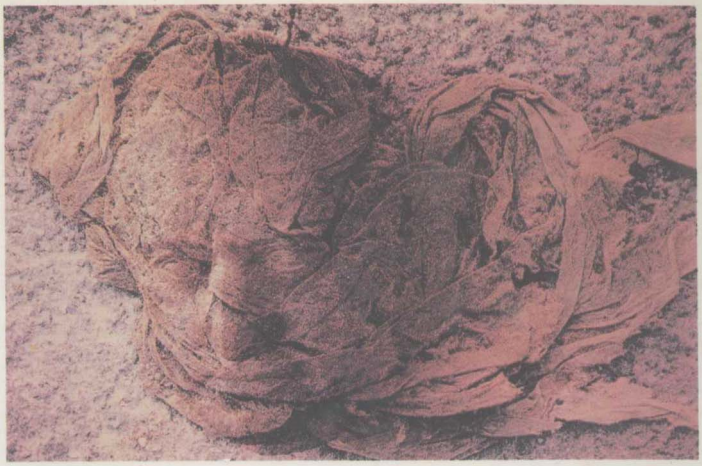

FISSIONES

ボルヘス「伝奇集」

Jorge Luis Borges

鼓直 訳

FISSIONES

ボルヘス「伝奇集」

Jorge Luis Borges

鼓直 訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

福武書店

ホルヘ・ルイス・ボルヘス

伝奇集

鼓直 訳

*

1990年11月20日第一刷印刷
1990年11月27日第一刷発行

発行者　福武總一郎
発行所 株式会社 福武書店 〒102 東京都千代田区九段南2-3-28
電話 東京（03）230-2131　振替 東京2-87372
印刷所 凸版印刷
製本所 大口製本
装　丁 坂川栄治

定価はカバーに表示してあります
ISBN4-8288-4012-5 C0097
NDC 990 190 188
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

伝奇集＊目次＊

八岐の園

プロローグ 8
トレーン、ウクバール、オルビス・テルティウス 10
アル・ムターシムを求めて 31
『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール 40
円環の廃墟 53
バビロンのくじ 60
ハーバート・クエインの作品の検討 68
バベルの図書館 75
八岐の園 86

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

工匠集

プロローグ 102
記憶の人フネス 104
刀の形 115
裏切り者と英雄のテーマ 123
死とコンパス 128
隠れた奇跡 143
ユダについての三つの解釈 152
結末 160
フェニックス宗 165
南部 170
訳者あとがき 179

伝奇集

八岐（やまた）の園（一九四一年）

プロローグ

この本の八篇はとくに説明を要しない。八番目の作品――「八岐の園」――は推理小説的である。読者は、その目的を知らないわけではないが最後まで理解不可能だと思われる、ある犯罪の遂行と準備のいっさいに立ち会うことになるだろう。他のいくつかの作品は幻想的である。そのひとつ――「バビロンのくじ」――は象徴主義とまったく無縁ではない。「バベルの図書館」という物語を書いた最初の人間は、このわたしではない。その歴史および前史に好奇心をいだくむきは、レウシップスとラスウィッツ、ルイス・キャロルとアリストテレスなどの異質の名前が記録されている、雑誌『スル（南方）』の五十九号のあるページを調べるとよい。「円環の廃墟」ではいっさいが非現実的であり、「『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール」では主要人物がみずからに課する運命がやはりそうだ。筆者が彼のものとしてあげる著作のリストはあまりおもしろくはないが、しかし気まぐれなものでもない。それは、彼の精神史のいわば図式であって……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

厖大な書物を物すること、数分間で語りつくせるひとつの着想を五百ページにわたって展開するのは、労のみ多くて功少ない狂気のさたである。もっとましな方法は、それらの書物がすでに存在すると見せかけて、要約か解説を差しだすことだ。『衣裳哲学（サーター・リサータス）』においてカーライルは、また、『美しい港』においてバトラーはこの方法をとったが、これらの著作は、あの他の著作におとらず同語反復的な、やはり書物であるという欠陥を持っている。より論理的で、より無能で、より怠惰な筆者は、架空の書物にかんするノートを書く道をえらんだ。「トレーン、ウクバール、オルビス・テルティウス」、「ハーバート・クエインの作品の検討」、「アル・ムターシムを求めて」がそれである。最後の作品は一九三五年のもので、筆者はごく最近『聖なる泉』（一九〇一）を読んだが、おおよその筋はおなじものだといってよい。ジェイムズの微妙な小説の語り手は、BにAかCの影響があるかいなかを探り、「アル・ムターシムを求めて」のなかの語り手はBをとおして、Bの知らない、きわめて遠いZの存在を予感もしくは予知しているのだ。

ホルヘ・ルイス・ボルヘス

ブエノスアイレスにて、一九四一年十一月十日

トレーン、ウクバール、オルビス・テルティウス

I

わたしのウクバール発見は、一枚の鏡と一冊の百科事典の結びつきのおかげである。鏡は、ラモス・メヒーアのガオナ街のとある別荘の廊下の奥で、人をおびやかしていた。事典はもっともらしく『アングロ・アメリカ百科事典』（ニューヨーク、一九一七年版）と呼ばれていたけれども、一九〇二年版の『ブリタニカ』の忠実だが時期を失した感もある焼きなおしだった。話は五年ほど前にさかのぼる。その夜、ビオイ＝カサレスと夕食をともにしたあと、わたしは彼を相手に長ながと議論していた。語り手が事実を省略もしくは歪曲し、さまざまな矛盾をおかすために、少数の読者にしか――ごく少数の読者にしか――恐るべき、あるいは平凡な現実の予測が許されない、一人称形式の小説の執筆についてである。廊下の遠い奥から、鏡がわたしたちの様子をうかがっていた。深夜ともなれば避けがたい発見で、わたしたちは、鏡には妖怪めいたところがあることに気づいた。そしてビオイ＝カサレスが、ウクバールの異端の教祖の一人のことばを思い

だした。鏡と交合は、人間の数を増殖するがゆえにいまわしい、といったというのだ。この記憶に値することばの出所を尋ねると、『アングロ・アメリカ百科事典』のウクバールの項にのっている、と彼は答えた。じつは家具付きで借りたのだが、別荘にもこの事典が一セット置かれていた。四十六巻の末尾にウプサラの項が、四十七巻の始めにウラル・アルタイ語の項があったが、しかしウクバールにかんする項目はなかった。ビオイはいささか当惑して、数巻もの索引にあたった。思いつく綴り――Ukbar, Ucbar, Ookbar, Oukbahr……――をすべて探してみたが、徒労に終わった。辞去する前に彼は、それはイラクか小アジアの一地方である、といった。告白するが、わたしはある不愉快さを感じながらうなずいた。その書物にない国と無名の教祖は、控えめなはずのビオイが自分のことばを裏づけるために、その場ででっち上げたものだとにらんだからである。ユストゥース・ペルテスの地図の一枚を調べてもだめだったことで、わたしの疑いはいっそう強くなった。

翌日、ビオイはブエノスアイレスから電話してきた。その話によれば、『百科事典』の第四十六巻のウクバールの項をいま見ているという。教祖の名前は明らかでないけれども、その教義については記述があり、それはビオイが引いたものとほとんどおなじことばでなり立っていた、どうやら文学的にはおとっているが。ビオイが思いだしていったのは、「交合と鏡はいまわしい」だった。『百科事典』の文章ではこうである。「それらグノーシス派に属する者にとっては、可視の宇宙は、幻影か、より正確には誤謬である。鏡と父性はいまわしい――mirrors and fatherhood are abominable――、宇宙を増殖し、拡散させるからである」じつをいうと、わたしはその項目をこの目でたしかめたいと申し入れた。二、三日して彼は『百科事典』を持参した。わたし

は驚いた。リッターの『地図学』の周到な索引も、ウクバールという地名を完全に無視していたからである。

ビオイが持参した巻は、事実、『アングロ・アメリカ百科事典』の第四十六巻であった。扉と背のアルファベット順の見出し（Tor—Ups）はわたしたちのセットのものと同一だが、九一七ページではなく九二一ページあった。このよぶんな四ページに、ウクバールに関連の項目はふくまれていたのである。読者はすでに気づいているはずで、その項目はアルファベット順の見出しにはなかった。その後、わたしたちは二巻のあいだにはほかに相違点のないことを確認した。すでにいったと思うが、二巻とも『ブリタニカ百科事典』第十版の増刷分であった。ビオイはそのセットを、よくあるバーゲンで手に入れたのだ。

わたしたちは少し丁寧にその項目を読んでみた。ビオイの記憶していたものだけが、どうやら、ひとを驚かすにたる唯一の文章だった。それ以外の文章は非常にもっともらしく、書物ぜんたいの調子によくマッチしていて、当然のことながら、少しばかり退屈だった。くり返し読んでいるうちに、わたしたちは、その厳密な文章のかげに重大な曖昧さがひそんでいることに気づいた。地理の部に出てくる十四の名前のうち、わたしたちに分かったのは三つ——クーラサン、アルメニア、エルズールス——だけで、これらは曖昧なかたちで本文に組み入れられていた。歴史上の名前では、むしろ隠喩として引かれているのだが、いかさま師で魔術師のスメルディス一人であった。文章は一見、ウクバールの境界を正確に示そうとしているかのようだが、そこに述べられていることは曖昧で、その地方に存在する河や火山、山脈にすぎなかった。つまり、ツァイ・ハルドゥンとアクサ・デルタが南の国境で、このデルタの島々には野生馬が繁殖している、という

ぐあいなのである。これは、九一八ページの冒頭に書かれていることだ。九二〇ページの歴史の部では、十三世紀の宗教上の迫害が原因で、正統派の信者らがこの島々に逃れたこと、そこにはいまなお彼らのオベリスクが残っていること、彼らの石の鏡が発掘されることもまれではないこと、などをわたしたちは知った。言語と文学の部は短いものだった。記憶に値する点はただひとつ、その記述によれば、ウクバールの文学は幻想的であり、叙事詩や伝説もまったく現実とかかわりを持たず、ムレイナスとトレーンという、ふたつの架空の地方にまつわるものであるということだ。文献に四冊があげられていたが、現在までのところ、それらに出会っていない。もっとも、三番目の本――サイラム・ハスラム著『ウクバールと呼ばれる国の歴史』一八七四年版――は、バーナード・クワリッチ書店の図書目録にのっている。* 一番目の本、『小アジアのウクバールという国にかんする、興味ぶかく読むに値する考察』は一六四一年の日付で、ヨハン・ファレンティン・アンドレーの作品である。この事実は意味がある。二年後に、わたしはド・クィンシーの『著作集』第十三巻のなかで、偶然その名前に出くわし、それがドイツの神学者の名前であること、彼は十七世紀の初葉に薔薇十字という空想の共同体について記述していること、そしてこの共同体は彼が予想したところにならって、他の人びとによって設立されたことなどを知ったのである。

その夜、わたしたちは国立図書館を訪れた。地図、目録、地理学協会の年鑑、旅行者や歴史家の日記などをあさったが徒労に終わった。ウクバールに足を踏み入れた者は一人もいなかったのである。ビオイの百科事典の総索引にもその名前は記載されていなかった。翌日、カルロス・マストロナルディ――わたしは彼にこの話をしたのだ――がコリエンテス街とタルカウアノ街の角

の本屋で、『アングロ・アメリカ百科事典』の黒と金色の表紙を見かけた。彼はその店に入ってゆき、第四十六巻を調べた。当然のことながら、ウクバールについての記述はまったく見あたらなかった。

II

南部鉄道の技師だったハーバート・アッシュの色あせていくかすかな思い出は、アドロゲのホテルのむせ返るようなスイカズラの茂みに、多くの鏡がかけられた幻想的な内部に、生きながらえている。生前の彼は、ほとんどのイギリス人がそうだが、甚だしい非現実感に悩まされた。そして死後の彼は、生前すでにそうであったが、幽霊ですらない。彼は長身で、投げやりな感じの男だった。そのしおたれた矩形の顎ひげも昔は赤かった。わたしの想像だが、彼は男やもめで子供もなかった。数年ごとにイギリスに帰り、日時計と樫の森を訪れた。彼がわたしに見せてくれた数枚の写真から判断したことである。わたしの父は彼と親交を結んだ。というのはいささか大仰で、それは、手はじめに打明け話を繰りだし、たちまちのうちに会話を切り捨ててしまう、あのイギリス流の友情だった。二人は本や新聞を交換した。黙ってチェスの勝負を戦わした……。数学の本を手にして、ときおり、消えてふたたび戻らない空の色を眺めていた、ホテルの廊下の彼の姿が記憶にある。ある日の午後、わたしたちは十二進法――十二が十と書かれるもの――の話をした。アッシュがいうには、目下、十二進法による計算法とやらを六十進法――六十を十と書くもの――に変換しているということだった。さらに彼は、その仕事はリオ・グランデ・ド・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.